

6. まとめ

私たちは国語と数学を中心にしたグループ学習に焦点をあて「わかる」を大切にした授業について検討してきた。「わかる」授業というテーマはいまさらという感もするが、コミュニケーションを苦手とする生徒が大半を占める現状からの「わかる」に視点をあてた授業を分析することは今日の問題につながると考えてきた。

さてこれまで私たちは中学部教育を進める上で大切にしてきたことは

- ・子どもから出発する
- ・子どもとともに生活づくりをする
- ・子どもとのコミュニケーションを大切にする

の3点である。

今年度の「わかる」授業はこれらを踏まえながら、授業の中に「わかる状況」を工夫する、「生活の文脈」を活用する、「わかり合いながら」授業を進めていくに重点をおいてきた。昨年度からのHAPPY・TIME（学部集団活動）、散歩（生活の時間の活動）、フリーデイ（総合的学習）で見せる子どもの生き生きした姿を教科学習の中にも発揮させたいという昨年のテーマに続く「わかる」グループ学習の検討ということになる。

（1）グループ学習の前提について

①まず子どもを教師がわかることからスタートする

1学期間というものの授業の成立に私たちはこれまでにないエネルギーを求められた。教室にスムーズに入れられない、じっと座っていることができない、友だちや教師の動き・声が気になるなど集団全体が揺り動かされた。私たちは一人一人の様子を丁寧に見ていくことで表面的には困った行動に見えてもそこには本人の気持ちがあり、その気持ちを理解していく大切さを話し合ってきた。子どもから出発することは当たり前のことではあったがたえず教師集団で確認し、その上で共通の対応をとることにしていった。グループの学習集団は縦割りで構成されておりこれは不可欠のことでもあった。

②学級が子どもにとって心地よい居場所となっているか

担任2人とクラスメイト6人で構成される学級、教室が子どもにとって共に生活する場である。この生活空間と人間関係が子どもにとって心地よい居場所となっているかが子どもの意欲や柔軟性、頑張りなどに強く影響している。学校生活の流れはここを軸に動き、心の揺れや喜怒哀楽はこの学級の中で受け止められる。教師と子どもたちの関係が互いに心を開放し、認め合い、受け入れ合い、信頼し合う、そのような集団であり、教室がそのような場、空間となることが安定した教科学習を保証すると考えている。

（2）「わかる状況」づくり

①子どもが何を求められているかがわかる状況づくり

授業検討でよくでた感想である。教師は自分のスタイルで活動を展開していくが子どもは何をしてよいか戸惑い、その場を離れる行為につながっていく。そこで子どもの関心あることがらなどを取り入れ、具体的なわかる状況を目の前に設定することにしたのが事例

1の「同じ長さ～木工の活動を通して～」である。同じという概念を具体的なモノ、具体的な活動に取り組むことでその意味がわかり、ことばとも結びつくと仮定した。言語指示が減り、子どもの様子をよく見ることができるよう出てきた。目の前のモノや展開される活動がベンチづくりの見通しを子どもの内面に形成し、次への意欲も高めることができた。視覚優先と昨今よく言われるが子どもたちは教師の言葉よりも、見てわかる手続きを求めていることを私たちに教えてくれた実践であった。できあがったベンチは学校生活に生かされ、利用する人とかかわりが生まれる。この連鎖の意義を今後も検討したい。あわせて具体的な活動をみんなと共同化する過程においてのチームティーチングと一人一人の学習課題の明確化を課題としたい。

② 題材を生活の中に求める

事例2では日常的に利用しているカレンダーを取り上げた。生徒の実態からねらいを数字や曜日の文字と音声の対応、日付の読み方、日付と曜日の対応においた。一人一人に合わせ楽しく授業を進める工夫などが評価されたが、カレンダーは生活との結びつきの中でこそその意味がわかり、わかれば曜日や日付へも関心が向くという議論が展開した。朝の会やハッピータイムにおける日・週の予定の確認の機会で見せる子どもの様子からの指摘である。つまりグループ学習で取り上げる時にはその学習集団を構成する一人一人とカレンダーの関係が明らかにされる活動が付け加えられると良いのではないかということである。学んでいることが単に知識として蓄積されるのではなく、友だち即ち他者との関係の中でわかりあっていく営みや生活世界との具体的関連をみんなで確認し合うことが授業の良さである。教師のねらいはその中で達成されるという視点を示唆し、この視点に立った実践が待たれる。

事例3の「自己紹介」は子どもたちの生活の中に頻繁にあるチャンスを生かした授業である。自分を紹介するときの内容や方法を教師が教え、やがては自分で話したいこと、書きたいことを自由に表現していくスタイルで取り組まれた。繰り返しの中で自信が付き、内容も充実していく。ややもすれば指導が支援に終わるという傾向がある中で、教師がしっかり教え込むこと、認め褒めること、機会を逃さないことが子どもの実感を高めると共に学びの原動力になった。さらに実際の生活の中で自力で自己紹介する子どもに育つための工夫がされつつある。いろいろな支援のためのアイデアは子どもと共に取り組む活動の中から浮かびあがることを改めて示したと言える。

③ 子どもと教師で授業をつくる

教師の一方的な押しつけの授業では子どもたちは素直に拒否してくる。わからないよと率直に訴えてもくる。事例4の「かべ新聞づくり」は教師と子どもたちが一緒に共同作業することで一人一人の学習課題に迫った実践である。発言や発想のスタイル、行動のスタイルが様々である者同士が同じ課題に向かう。相互に交わり合いながら、触発されまたつながり合いながら、それぞれが学習主体としての自分をつくりあげていく。インターネットを活用したりデジタルカメラを使ったり、お客さんにインタビューしたり、さまざまな学びの方法を体験する。これらの新聞を作り、発表する文脈がよく理解され、学校生活を自分に引き寄せてもいる。自己紹介にしてもかべ新聞にしても、非日常の、知識の詰め込

みではなく、人と出会う喜び、知る喜び、実感の共有などが子どもの学習意欲を高めたと言える。

④生活の文脈を生かす

事例5は子どもとのコミュニケーションをいかにとり授業を進めていくか、子どもの気持ちをどう理解するか、教師は子どもにどう伝えれば伝わるのか等いまだにその課題をもち続けているが、一つの試みとして履物やスリッパの片づけに取り組んだ。履物が散らかっていたら、履物入れに片づけるという生活の一コマを授業の中に取り込んだ。その場に立ち、履物を見分けながら課題に取り組むことができている。

この学習集団で取り組む教育内容は何か、何をこそ子どもの獲得すべき課題としたらよいのかという点についての論議はまだ不足している。しかし一つの片づけるという活動はそこに具体的な状況があり、持って、入れるという生活の中で繰り返し経験しているわかりやすい文脈が存在する。次に取り組んだ雑巾の洗濯という活動にもわかりやすい文脈を背景に水とのふれあい、スイッチ音など五感を刺激し、活動への参加が意欲的である。

今からみんなと何をするのかが見てわかり、活動のプロセスにおいて言葉や数の領域に関する学びと結合させる機会を含んでいる。動き回りながらも友だちの様子を見たり、待ったりなどのその仲間間のかかわりがある。合科・統合、生活単元学習との関連や教科の基礎・基本とは何かを私たちに提起している。

⑤教材・教具を子どもに合わせる

事例6の「～さわって、あそんで～」は遊びながら課題に近づく教材・教具（玩具）づくりに取り組んだ事例であり、教師自身が得意とする分野を生かしながらの実践である。初め教師の作った教材・教具（玩具）は子どもたちに与えられる印象であったが、そこにあるからそれにさわるという状況が設定され、教師も強いることなく徹底してさわって遊ぶ状況を保証した結果、子どもたちは自ら手にとり何度も繰り返して遊ぶようになっている。

自然と友だちや教師とのやりとりが生まれている。またどのように遊んでいるかを見極めた上で新しいものを作ったり、親の願いを込めたものを作ったりして新しいモノが次々と誕生している。

玩具とはいうものの教科内容の意図を十分に組み入れたいいわゆる教材・教具である。これらと子どもとをどう出合わせるかを試行した実践である。遊びの中にある子どもたちの提案をいかにキャッチするか、教師との語らいの中で共同で生み出される玩具（教材・教具）づくりを追求、模索できないかを問い続けていきたい。

子ども一人一人がわかる学習活動に近づくために現在いろいろ試みている段階である。これまで私たちがわかったことは授業に具体的なわかりやすい状況をつくることと子どもの生活の文脈を活かすこと、子ども一人一人の生活の実態や生活年齢の重み、個性や傾向、発達上の課題を理解すること、子どもと教師が一緒に作り上げる視点をもつことなどである。

これらを考え実践し、ていねいに検証し合っていくことが私たちに課せられている。

（榎 蔵 千恵子）

【参考文献】

- 1) 山鳥 重 「『わかる』とはどういうことか－認識の脳科学」 ちくま書房
- 2) 坂口 和宏 「楽しい教科別の学習の考え方」 発達の違いと教育 2002. 5月号
- 3) 太田 俊己 「生活にねざした教科の指導」 発達の違いと教育 2000. 9月号
- 4) 馬場 礼子 藤原 一郎
「時刻・時間・暦」 実践障害児教育 2000. 10月号
- 5) 小寺 富子 「言語発達遅滞の言語治療」 診断と治療社 1998